

リスクに関する報道の問題点

科学ライター、一般社団法人FOOD COMMUNICATION COMPASS代表 **松永 和紀**

2014年9月16日、霞が関合同庁舎4号館

1

FOOD COMMUNICATION COMPASSは 科学的根拠に基づく食情報を提供する消費者団体です

* 活動の目的

消費者団体・事業者・行政・研究者と連携しながら科学的根拠に基づく情報発信を行うことで、消費者が冷静に食の問題に対処できる社会を作るために活動をしています。

* 主な活動

ウェブサイト「FOOCOM.NET」で、食情報を無料で広く発信しています。活動を支援して下さる有料会員には、メールマガジンで詳細情報を届けています。



<http://www.foocom.net/>

代表・編集長 **松永和紀**
(科学ライター)
事務局長 **森田満樹**
(消費生活コンサルタント)

2

「食の安全を守る」の大きな変化

従来は.....

製造する環境をきれいにし、農薬や食品添加物、抗生物質等を使わなければ、「安全な食品」ができる。そのことを、最終製品の抜き取り検査で確認



リスクアナリシス

問題発生を未然に防止したり、悪影響の起きる可能性を低減するための枠組み

リスク評価 食品中の有害物質の摂取、どの程度の健康への悪影響がどのくらいの確率で起きるかを科学的に評価

リスク管理 科学的データ・評価に基づいて、リスク低減のための政策・措置を検討し、必要に応じて実施する

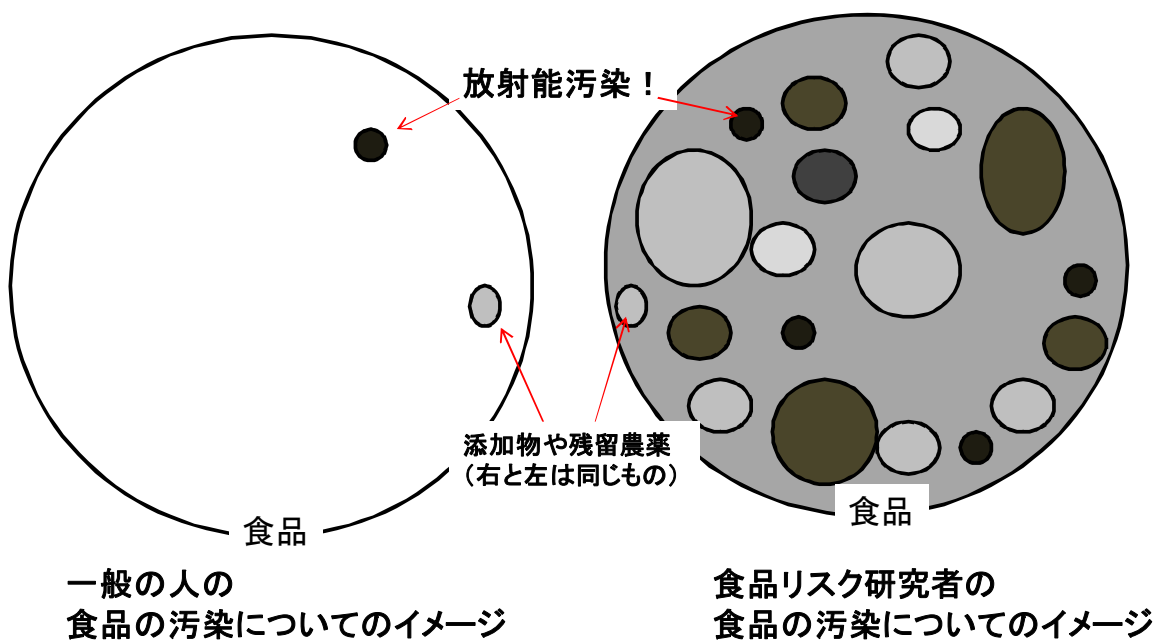
リスクコミュニケーション リスク評価と管理において、食品事業者や消費者、関係者間で情報を共有し意見交換し、政策や措置に反映させる

農水省の資料を一部改変

3

食品、イメージで表現すると.....

→食品はリスクゼロではない



国立医薬品食品衛生研究所安全情報部第三室長

畝山 智香子先生の『「安全な食べもの」ってなんだろう? 放射線と食品のリスクを考える』(日本評論社)より

食品—多様な物質、未知の物質、微生物等の塊

- 栄養成分(炭水化物、脂質、タンパク質、ビタミン類、ミネラル類.....)
- 食品がもともと持つ、その他の物質(味、香りなどにかかわる物質、健康効果を持つかもしれない成分、毒性物質、発がん物質など。未知の物質も多い)
- 付着した微生物
- 付着したカビが作った毒性物質
- 加熱など、製造調理の工程でできる物質(発がん物質も多い)
- 残留農薬
- 食品添加物
- 放射性物質

etc.

5

「食の安全」=リスクを決める、二つのこと

- なにを
- どれだけの量

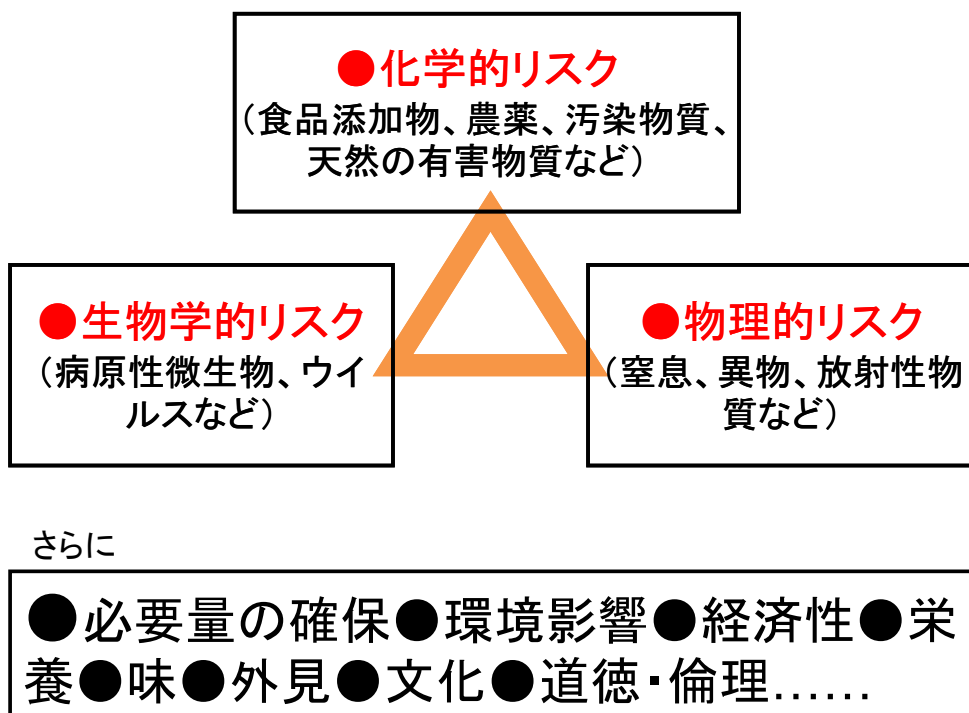
食べるか？

リスク=ハザード(有害性)×摂取量

6

食品を作るとは, 食べるとは～

求められる俯瞰的、統合的視座



7

科学的根拠に基づく「リスク管理」の変化が知られていない、理解されていない—理由は…

- 確率論的に考える必要がある「リスク」概念の理解の難しさ
- 行政や企業による情報提供の不足
- 人が持つ、本来的な「リスク認知」のバイアス
- 歴史的経緯
- 報道のバイアス
- 消費者の意識改革未だ

食品安全基本法 第九条

消費者は、食品の安全性の確保に関する知識と理解を深めるとともに、食品の安全性の確保に関する施策について意見を表明するように努めることによって、食品の安全性の確保に積極的な役割を果たすものとする。

消費者基本法 第七条

消費者は、自ら進んで、その消費生活に関して、必要な知識を修得し、及び必要な情報を収集する等自主的かつ合理的に行動するよう努めなければならない。

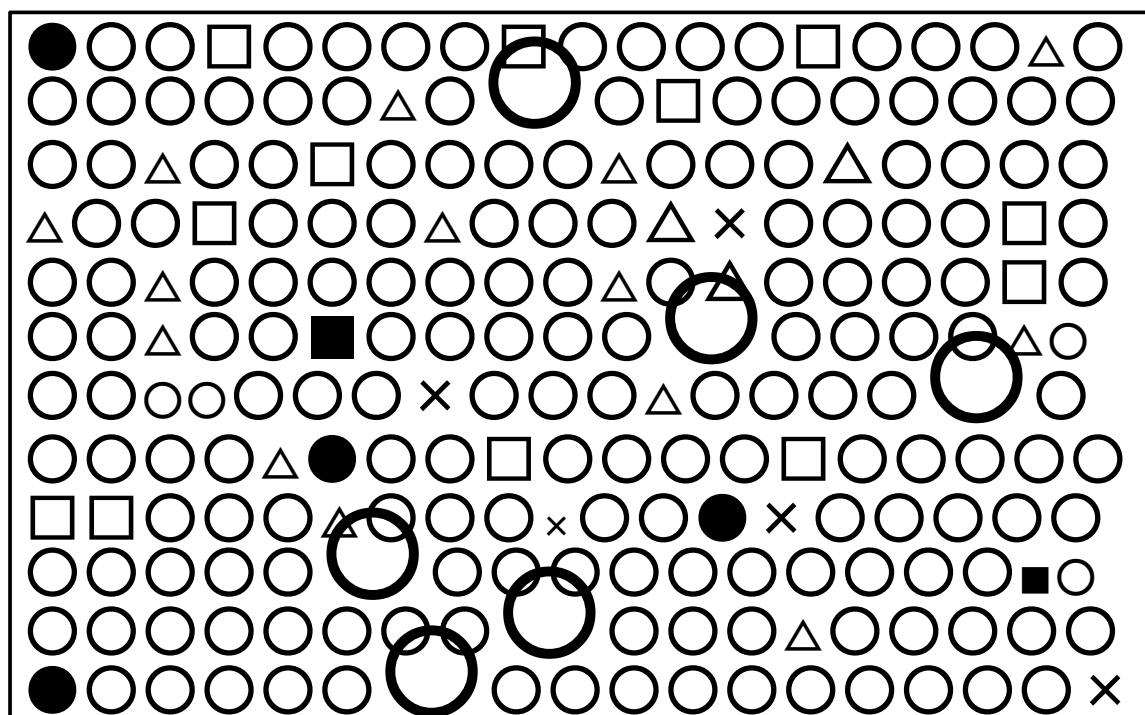
消費者は、消費生活に関し、環境の保全及び知的財産権等の適正な保護に配慮するよう努めなければならない。

リスクに関する報道の問題点

- 専門知識が足りない、調べる時間がない
- 専門記者を育てようとしないメディアが多い
- マスメディアにとって、情報は商品
 - ◆ 悪いニュースがいいニュース
 - ◆ 目新しい話は、発生確率がどれほど低くても価値が高い
 - ◆ センセーショナルが最優先
 - ◆ 分かりやすい二元論(無添加は○、添加物は×、中国産は悪、国産は善…)
- 思惑のある学者、評論家、市民団体等
- 浅い正義感(「危ない」「問題だ」という警鐘報道は、読者、視聴者を喜ばせ、社内受けもいい)
- コスト感覚の不足
- 一過性の報道

9

判断のために検討しなければならない科学的根拠の“量”と“質”



10

日本だけの問題ではないが、諸外国に比べてより深刻、のように思える

日本の特徴

- メディアが多いようで、少ない
- 科学記事が少ない
- 政府への信頼度が低い(OECDのGovernment at a glance2013など)
- 科学者のコミュニケーション活動に対する社会的評価が低い
- 市民活動が弱い
- 理科教育の不足

11

メディアは情報伝達的手段。判断はあなた！

一つのものごとを構成する多様な事実、複雑な要素の中から、一部だけピックアップして伝えるのが「報道」というもの

メディア・バイアス

特定のだれかに都合の良い情報だけが、発信され続け拡大し、やがて“真実”になる



「受け身」を脱し、学び、情報を発信

＜科学の読み書きそろばん力＞をつけよう！

＜メディア・リテラシー＞

12

科学の読み書きそろばん力をつける十カ条

1. 懐疑主義を貫き、多様な情報を収集して自分で判断する
2. 「〇〇を食べれば…」というような単純な情報は排除する
3. 「危険」「効く」など極端な情報はまず、警戒する
4. その情報がだれを利するか、考える
5. 体験談、感情的な訴えには冷静に対処する
6. 発表された「場」に注目する。学術論文ならば、信頼性は比較的高い
7. 問題にされている「量」に注目する
8. 問題にされている事象が発生する条件、特に人に当てはまるのかを考える
9. 他のものと比較する目を持つ
10. 新しい情報に応じて柔軟に考えを変えてゆく

「メディア・バイアス あやしい健康情報とニセ科学」(光文社新書)より

13

適正な情報を集めるには

- とっかかりは、どんなメディアでもいい
- 情報源をさかのぼる
- 行政情報は比較的信頼度が高い
- インターネットで食品安全委員会や行政機関、企業や研究機関、生協、市民団体などのサイトも見てみよう
- 現場に行って話を聞こう

以前とまったく違うこと

私たちは、マスメディアや詳しい専門家と同じように、検査結果、論文、報告書など一次情報を入手できる！

14

主な著書

- 『「食品報道」のウソを見破る～食卓の安全学』（家の光協会）
- 『踊る「食の安全」～農薬から見える日本の食卓』（家の光協会）
- 「メディア・バイアス～あやしい健康情報とニセ科学」
光文社新書）
- 「植物まるかじり叢書5 植物で未来をつくる」（化学人）
- 「食の安全と環境～気分のエコにはだまされない」（日評論社）
- 『もうだまされないための「科学」講義』（共著、光文社新書）
- 『お母さんのための「食の安全」教室』（女子栄養大学出版社）



連載

- 月刊誌「栄養と料理」（女子栄養大学出版社）で、「科
記者のつぶやき帖 食の現場でおととと」
- 日経バイオテック（日経BP社）で「FOOD SCIENCE」
- 月刊誌「地上」（家の光協会）で「EBAのススメ!」
- 福井県民生協広報誌「がんばらにゃ」
- コープいしかわ広報誌「とらいあんぐる」

FOOCOM.NET

<http://www.foocom.net/>

ご意見は、matsunaga@foocom.netへ